

アジアにおける冷戦の形成

二つのイメージとその再検討

松村史紀

はじめに

アジアにおいて冷戦とは何だったのか。いつ、どのように始まって終焉したのか。これまで様々な議論が展開されてきた。特にアジアにおいて冷戦がどのように形成されたか、という問題について言及した研究成果は多数ある。各論者はアジアの冷戦について多様な解釈を与えてきたが、その研究状況が体系的に整理されるということはほとんどなかった⁽¹⁾。それゆえ各々の解釈が相互に対話をせず議論が孤立していることが多かった。そもそも戦後アジアの国際関係を冷戦と関連づけて分析することは、あまりにも自明のことであったために、冷戦という切り口で分析することそれ自体が疑われることはほとんどなかった。近年、一部の冷戦史研究では、戦後の国際関係を「冷戦」から分析すること自体に対して再検討が加えられている⁽²⁾。

本稿では「アジアにおける冷戦の形成」という観点から、従来の研究成果を体系的に整理したい。その上で従来の議論の問題点を再検討し、新たな研究のアプローチを探りたい。

研究状況を整理する前に、「冷戦」とは何かを簡単にまとめておく必要がある。本稿では第二次世界大戦以後に生じ、1990年前後に終焉した「冷戦」を四つの特徴から捉える。第一に、米国とソ連の二超大国が国際政治のなかで圧倒的優位に立ち、勢力範囲争いや軍

備拡張など権力政治闘争を繰り返した。さらに米ソが中心となって東西両陣営が形成された。第二に、米ソ或いは両陣営間で政治体制の正当性をめぐるイデオロギー対立（自由主義、資本主義対共産主義、社会主義）が生じた。第三に、核兵器の存在によって、局地戦争は存在しても世界戦争には至らない状況が生まれた。第四に、米ソを中心とする敵対関係が、植民地状態におかれた地域の脱植民地化運動と連動し世界的な広がりを見せた⁽³⁾。

「冷戦」は以上の特質をもつ状態であるが、全体を時間軸で区切ってみれば、「冷戦」状態が深刻になったり緩和したり変化していることに気付く。そこで「状態変化の方向性」を表す概念が必要になる。本稿では状態が深刻になっていくプロセスを「構造化」、緩和していくそれを「デタント」とする⁽⁴⁾。「構造化」とは、米ソが中心となってイデオロギー対決、軍事的対峙、政治的緊張を西側、東側陣営にそれぞれ押し広げていく国際政治過程である⁽⁵⁾。具体的には、米ソを中心とした同盟関係の形成やある地域諸勢力に対する軍事的、政治的、経済的支援を通じた間接介入、直接介入そして軍拡競争などを含む⁽⁶⁾。一方、「デタント」とは、「構造化」が一定程度進行した段階で米ソを中心とする上記の対立構造が緩和していく過程のことである。具体的には同盟関係の破綻や解消、各種の支援や介入

の停止や緩和、軍備管理、軍縮などが生じる過程である。

「冷戦」を何らかの安定した構造として捉えるのではなく、一つの「状態」として理解し、その「状態」が生成、形成、変化する現象を二つのプロセスから理解するというのが本稿の立場である⁽⁷⁾。

「アジアにおける冷戦の形成」を めぐる二つのイメージ

「アジアにおける冷戦の形成」について従来の研究は多様な議論を展開してきた。しかしそれらは大きく二つに分類できる⁽⁸⁾。両者は相互に異なるイメージを抱いている。

第一は「米中対立の構造化」というイメージである（以下、第一イメージ）。これは米ソ冷戦の構造化イメージを米中関係に投影した見方である。つまり米国とソ連東側陣営に帰属する中国が中心となり、イデオロギーの対立、軍事的対峙、政治的緊張がアジア地域に押し広げられていく国際政治過程とでもいべきものである。このイメージに依拠する多くの論者がこの過程を「アジア冷戦」と呼んでいる。

第二は「局地的な米ソ対立」のイメージである（以下、第二イメージ）。これは主に1945年8月の終戦直後の時期から50年6月の朝鮮戦争勃発期まで、米ソ対立がアジア地域に存在したという見方である。この場合の米ソ対立は主に政策決定者の認識レベル（信条、イデオロギー）が中心となる。さらに具体的な政治的、軍事的緊張が一部の地域に局地的に見られたことにも注目する⁽⁹⁾。こうした米ソ対立を「冷戦」と呼ぶのがこのイメージの特徴である。

以下では、それぞれのイメージに属する研究ノート／アジアにおける冷戦の形成 二つのイメージとその再検討

研究成果を具体的に検討していく。なお、二つのイメージが使う「冷戦」という用語は、必ずしも本稿で定義した意味のものではない。従来の研究のなかで特に定義されることなく曖昧に使われてきたものである。また冷戦後、旧東側陣営諸国の公文書を使った新しい研究が出てきている。本稿では冷戦期に書かれた研究と冷戦後のものとを特に区別しないで取りあげている。各事件の評価など細部で両者の分析の違いが見られるが、二つのイメージそれぞれ自体に大きな変化はみられないからである。

第一イメージ

(1) 全般的特徴

第一イメージに属する研究成果⁽¹⁰⁾の全般的特徴として次の三点を挙げることができる。第一に、中心となるアクターが米国と中華人民共和国（以下、PRC）であること。対立構造の極となる大国を中心に捉えることに特徴がある。第二に、国家の外交戦略を分析する場合、イデオロギーよりも権力政治、安全保障という観点をより重視すること。第三に、1949-50年頃までアジアで冷戦は展開されていなかったという認識を前提とする。PRC成立や朝鮮戦争を契機にヨーロッパからアジアへ冷戦が波及し、「アジア冷戦」が構造化していくと見るのが特徴である。

ここで代表的論者である入江の研究（Irie, 1974）を簡単に検討したい。彼の議論が前提にする概念が「ヤルタシステム」である。ヤルタシステムは、1945年2月のヤルタ会談で合意された内容を基礎に形成された国際関係の枠組みで、二つのレベルから構成される。第一はパワー・ポリティクス（権力政治）のレベル。米英ソが地政学的思考を基に勢力範

困を確定し、勢力均衡を保持することがその内容であり、そこには三国の国内的安定、安全保障、経済的繁栄といった国益が反映されていることになる。第二はイデオロギーや政策決定者の認識のレベル。ここでは米ソ関係は協調か敵対かのいずれかであるということになる。敵対する場合は、それを冷戦的認識と見なすことになる⁽¹¹⁾。

入江は朝鮮戦争期までアジアではヤルタシステムが維持されたと見なしている。アジアにおいては主に米ソが勢力範囲を二分するのがヤルタシステムの特徴である。つまり米が太平洋、特に日本で支配的パワーを保持し、ソ連が北東アジア（中国東北、樺太、千島など）で優越的パワーを保持していた。ただし中国は米ソいずれの勢力範囲にも属さないグレーゾーンであった。1950年に入ってPRCがソ連と「中ソ友好同盟相互援助条約」を締結してから、中国がソ連の勢力範囲に入ることになった。ヤルタシステムはここで一部修正を余儀なくされるが、朝鮮戦争期まで米ソは基本的に自らの勢力範囲を超えないでパワーの強化につとめるのである。一方、米ソの政策決定者の認識レベルでは46年からイデオロギー対立が激化し冷戦的認識への変化が見られた。しかしたとえ認識レベルで変化が生じたとしても、権力政治のレベルでは50年6月まで大きな変化は見られなかったことから、全体としては朝鮮戦争期までヤルタシステムが維持されていたと結論づけるのである。朝鮮戦争勃発以降、米ソはヤルタに変わる新秩序を模索し、自らの勢力範囲を超えたパワーを初めて追求するようになった。休戦後、アジアでは米ソ対立よりも米中対立が顕在化し、サンフランシスコシステムというべき枠組みが形成された。つまりそれは米国、

日本対ソ連、PRCという対立の枠組みである⁽¹²⁾。

以上が入江の議論であるが、実は彼はアジアにおいていつ冷戦が開始したのかという点を明示的に述べているわけではない。権力政治のレベルと政策決定者の認識レベルで変化が生じ始める時期に差異があることがアジアにおける冷戦形成の特徴であるという点を述べているにすぎない⁽¹³⁾。ただ彼の分析によれば「ヤルタシステム」が朝鮮戦争直前まで維持されたことになるため、この入江仮説を受け入れる論者の多くは、アジアにおける冷戦の形成は朝鮮戦争期あるいは休戦後であると主張している⁽¹⁴⁾。

(2) 「アジア冷戦」形成の時期

米中対立が構造化していく時期はいつか、換言すれば「アジア冷戦が形成される時期はいつか」という点については、第一イメージに属する研究成果のなかでも意見が一致していない。この論点について大きく分けると二つの見方がある。

第一は、その時期を朝鮮戦争勃発にもとめる見方である。彼らは1949年から50年6月までの米国の対東アジア政策の特徴が基本的にアチソン国務長官の政策路線にあったと理解する。アチソンの路線には二つの特徴がある。一つは中国共産党（以下、中共）とソ連との離反を促進し、中共との外交関係を樹立しようとしたこと。二つ目は「不後退防衛線」戦略であり、西太平洋の島嶼に封じ込め線を引く（アリューシャン、日本、沖縄、フィリピンを結ぶ線で台湾や朝鮮半島は含まれない）というものである。「機会喪失論」という議論はアチソンの前者の戦略を評価し、当時米国が中共と外交関係を樹立し敵対関係を回避する可能性があったと論ずる⁽¹⁵⁾。ジョン・L・

ギャディスは「機会喪失論」を否定するがアチソンの後者の戦略を評価し、それが当時の米政府内のコンセンサスを形成していたと分析する⁽¹⁶⁾。いずれにしても彼らは、朝鮮戦争を契機にアチソン路線が破綻し、米中対立が構造化していったのだと論ずる。

第二の立場は、1949年後半に米政府内に東アジア政策をめぐる二つの封じ込め路線が存在し、それらが常に対立、論争していたと分析する。二つの路線とは上記のアチソン路線と軍部、中国ロビーの路線である。後者はPRCに対する強硬路線で、台湾を含む中国大陸周辺に対する封じ込めを主張する政策路線である。この路線が朝鮮戦争以後に全面化したのだと分析するのが彼らの特徴である。彼らは朝鮮戦争以前の米国の政策をアチソン路線に還元せず、朝鮮戦争前後の米国の東アジア政策に継続性があることを強調する⁽¹⁷⁾。

第一イメージのなかにもこのような論争点はあるものの、全体としては米中対立が構造化していく過程を「アジア冷戦」の形成過程と見なす点では一致している。

第二イメージ

(1) 全般的特徴

次に第二イメージに属する研究成果を検討してみよう。全般的特徴として次の四点を挙げることができる。第一に、中心となるアクターが米ソと米ソそれぞれと協力、連帯関係にあるアジア地域の諸勢力である。この分析手法は近年の冷戦史研究の動向に影響を受けたものである。つまり冷戦期のアジア諸国の役割、特に中国の果たした役割を再評価しようとする研究姿勢が背景にあるといえる⁽¹⁸⁾。第二は、アクターの外交戦略におけるイデオロギーや信条の役割に注目し政策決定者の認識を重視する。こうした分析手法も冷戦史研究の新しいアプローチの一つである⁽¹⁹⁾。第三は、終戦直後、特に1946年前後の時期に米ソ冷戦がアジアの一部の地域で見られたこと、さらに米ソ冷戦がアジア諸国内の対立と連動していたと評価していることである。第四は、新資料の利用である。冷戦終焉後、アクセスが可能になった旧東側陣営諸国の公文書を利用していることが特徴である。

以上のように、第二イメージの研究の多くは冷戦史研究の新しいアプローチを背景にしているといつてよい。以下では、具体的研究成果を取り上げてみよう。

(2) 米ソ冷戦と中国内戦との連動

第二イメージの研究成果として、例えばウェスタッドの研究を挙げることができる。彼は、1946年春に中国東北地域で発生した中国国民党と中国共産党との間の内戦と米ソ冷戦とが連動していることに注目した。彼の分析全体の特徴は、第一に米国、ソ連、国民党、中共の四つのアクターに同程度の重要性をおくこと、第二に太平洋戦争終結直後から東アジアの主要な国際的アクターが冷戦的認識を開始したことに注目していること、第三に中国内戦の起源が米ソ冷戦にあったと結論付けることである。その具体的な論証において、彼は46年春の米ソ国共四者それぞれの認識を次のように結論付けている。国共両者は、それぞれ米ソからの支持を確信して軍事力使用を背景とした東北争奪を決意した。ソ連は国民党と米国に圧力をかけるために中共に接近した。米国はソ連の影響力拡大を制限するために国民党を冷戦の同盟国にしようとした。以上から、46年春に中国東北で「米ソ - 国民党対ソ連 - 中共」という対立の構図

が見られたと結論を下している⁽²⁰⁾。ウェスタッドは中国やアジア地域の専門家というわけではないが、中国人研究者を中心として彼と同様の見解を示す論者は多い⁽²¹⁾。従って彼の研究は、第二イメージの典型例として挙げられる。

第二イメージに属する研究は、この他にも以下が挙げられる。一つは、近年活発になってきている「機会喪失論」への徹底的な反論である。1949年の時点で米国がいかなる政策を展開しても、PRCとの外交樹立の可能性がなかったというのが反論の主旨である。中共が断固として向ソ一辺倒、対米敵対の態度をとったことにその原因をもとめ、中共の外交戦略におけるイデオロギーの役割を極めて重視するのが特徴である。1946年の時点ですでに米ソ冷戦と中国内戦が連動していたのであるから、米国が中共と関係改善する余地はないというのがこうした反論の前提にあるといえる⁽²²⁾。

二つ目は日本をめぐる議論である。1947年、ジョージ・F・ケナンのイニシアティブにより対日占領政策に冷戦的観点である「封じ込め政策」が導入された、という研究成果⁽²³⁾がここでは第二イメージに属すといえる。

最後に、朝鮮半島に関する研究が挙げられる。ブルース・カミングスは1945年9月に朝鮮半島に米ソ冷戦が存在したとする。その上で、米国は南朝鮮に単独政権を樹立することで現地革命勢力を封じ込めようとしたこと、また43年から47年まで続いた4大国信託統治政策はスターリンを国際的枠組みのなかに封じ込めてそれを無力化させようとする反共主義であったと議論する⁽²⁴⁾。

米国から見たアジアの冷戦

(1) 「封じ込め」と冷戦起源論争

なぜ以上のような二つのイメージが生まれたのだろうか。様々な原因があるだろうが、なかでも米国のアジア政策に対する各論者の評価が二つのイメージに投影されていることに大きな原因があるだろう。実はアジアの冷戦だけではなく、これまで多くの冷戦史研究には明示的にせよ暗示的にせよ米国外交に対する評価が大きく反映されてきた。そこで、まず冷戦期の米国外交の特徴と冷戦史研究との関係を簡単に整理しておこう。

冷戦期における米国の外交政策の中心は「封じ込め」政策であった⁽²⁵⁾。「封じ込め」とは、ソ連、東側陣営の軍事的、政治的、経済的影響力拡大や共産主義イデオロギーの拡大を阻止するためにとられた一連の政策や理念である。ところで「冷戦起源論争」は、主に米国を中心に発展してきた。論争を展開した各学派は、米国の「封じ込め」に冷戦発生への責任があるかどうか、という点で評価が分かれている。しかし米国が冷戦という文脈で対外政策を立案していく起源を、「封じ込め」の理念や政策にもとめる点ではほぼ一致している。換言すれば、冷戦が形成される上で米国の「封じ込め」が、能動的であれ受動的であれ重要な役割を果たしたということを各論者が認めていることになる。

例えば「正統派 (Orthodox)」と呼ばれる学派は1940年代初期のスターリンによる東欧政策に冷戦の起源をもとめた。米国や西側諸国はスターリンの政策への対応として封じ込め政策を展開したのだとする。従って彼らは封じ込め政策が防衛的であったと主張する⁽²⁶⁾。

こうした「正統派」の見解への反論として生まれたのが「修正主義派 (Revisionist)」に

よる研究である。彼らは冷戦の責任を米国にもとめた。米国内の資本主義経済システムが無制限に海外への経済的影響力の拡大を要求したことに冷戦の起源をもとめたのである²⁷⁾。こうした議論は冷戦史研究に大きな影響を与え様々な研究業績を生み出した。例えばトーマス・パターソンは冷戦の起源を二つの要素から検討した。第一はトルーマンのソ連脅威に対する解釈。第二はその脅威への対抗策、つまり「封じ込め」政策である。彼は基本的に米国の封じ込め政策に冷戦の起源をもとめたのである²⁸⁾。

1970年代後期から現れた「ポスト修正主義学派 (Post-Revisionist)」においても、米国の「封じ込め」が議論の中心に据えられることが多かった。ジョン・L・ギャディスはその代表格である。彼は「冷戦の起源」を論じた著書のなかで、46年2月下旬から3月上旬にかけて米国政府が対ソ強硬政策に転換していく過程を描き出した。この政策は「封じ込め」政策と呼ばれ、冷戦形成において重要な役割を果たしたことが示されている²⁹⁾。

(2) 「限定的封じ込め」

では、米国の「封じ込め」政策という視点から「アジアにおける冷戦」はどのように考察されてきたのか。従来の研究は、二つに大別できる。両者ともに、戦後当初米国が「封じ込め」政策を実行する上で「適用範囲」と「適用手段」の問題を抱えていたことに注目する。「適用範囲」とは、米国がどの地域に対して封じ込め政策を実行しようとしたのか、という問題を指している。一方、「適用手段」とは封じ込め政策がどのような手段によって実行されていたのかを指している。第二次大戦後、1950年代初期までに米国がこの二つの問題にどのように対応してきたの

か。この点をめぐって論争が行われてきた。

第一の立場は、1947年から49年秋頃まで米国政府の「封じ込め」政策が「限定的封じ込め」政策であったと理解する。それは「封じ込め」の対象地域が主に西欧、東地中海、日本に限定されており、適用手段も経済復興支援を中心とした非軍事的手段に限られていたとする立場である³⁰⁾。この立場の論者が依拠する「限定的封じ込め」とはジョージ・F・ケナンの構想を基礎にした概念である。ケナンの構想は次のようにまとめられる。彼は、ソ連が直接的な軍事手段によってではなく、資本主義の内部的矛盾(政治経済的不安定)を利用して影響力を拡大する非軍事的脅威とみた。さらに米国の利用できる資源が限定的であるという認識をもっていた。こうした認識を前提にして封じ込め的手段を非軍事的手段に限定すること、対象地域を米国の安全保障にとって死活的となる地域に限定するよう提言したのである。こうしたケナン型の封じ込めが、49年秋頃からPRCの成立、ソ連の原爆保有、朝鮮戦争などを契機に変化していく。つまり適用範囲がグローバルに拡大し、適用手段も軍事手段を重視するような封じ込めに変化していくと理解するのである。この封じ込めは米国政府の国家安全保障会議の文書「NSC68」³¹⁾の路線を基礎にして理解したものである。「NSC68」では、ソ連が世界のどの地域へ勢力拡大してもそれは米国の国益を損なうというグローバルな範囲でのソ連脅威認識があり、局地紛争から全面戦争まで全ての軍事レベルでソ連の行動に対応できる軍事体制の維持が必要だとされた。

こうした見解が冷戦理解にも大きく反映されている。戦後当初、米国にとって死活的利益であった地域、特にヨーロッパを中心に冷

戦が開始し、1949年秋頃になってアジアにもそれが拡大、波及していったのだという理解である⁽³²⁾。なお、「適用範囲」や「適用手段」の問題を明示的に議論しなくとも、こうした見解をとる論者は多い⁽³³⁾。

(3) グローバルな「封じ込め」

こうした見解に反論するのが第二の立場である。主に「修正主義派」が積極的な反論を展開している。彼らが問題にするのは「封じ込め」の「適用範囲」である。米国が戦後当初から限定的ではなくグローバルな範囲で「封じ込め」を行ったというのがこの立場の特徴である。従って彼らは、アジア地域において米国が「封じ込め」政策を展開し始めた時期は、第一の立場が想定する1949、50年よりもっと早い時期であったと結論付ける。

例えば菅英輝は、戦後当初米国による「封じ込め」の「適用範囲」がグローバルな範囲であったと論じる。彼はその根拠を戦後米国が開放的で多角的な世界経済体制の形成を目標としていたという点にもとめている。ただし「適用手段」については第一の立場と同様の見解を示している。つまり朝鮮戦争を契機に「封じ込め」は非軍事的（政治的、経済的）手段から軍事的手段を重視するように変化していったという点は認めている⁽³⁴⁾。

第二の立場でも、米国が「封じ込め」を展開した時期とアジアで冷戦が形成された時期は重ね合わせて議論されている。見解の相違はあるが1945年から47年のいずれかの時期にアジアにおいて冷戦が形成されたのだという点では概ね一致している⁽³⁵⁾。

以上、「封じ込め」評価をめぐる二つの見解は、「アジアにおける冷戦の形成」の二つのイメージと重なり合うことがわかる。前者

が第一イメージ、後者が第二イメージと重なり合う。むしろ両者はそのイメージが形成される上で中心的役割を果たしているともいえるかもしれない。第一イメージでは米国の対中国「封じ込め」が、第二イメージでは米国の対ソ連「封じ込め」が重要な論点となってきたからである⁽³⁶⁾。

論争の特徴

(1) 堂々めぐりの論争

二つのイメージは、明らかに「アジアにおける冷戦の形成過程」をめぐる異なるイメージを抱いてきた。しかし、これまで両者ともにその点に気付かないか、あるいはその点を明示的に議論してこなかった。「冷戦」や「封じ込め」という言葉が明確な定義を付与されることなく、両者によって多義的に使用されてきたのである。両者が異なる見解を抱いている状況をここでは論争とよぶ。

これまで、戦後アジアにおいてどの時期から「冷戦」が開始されたのかが重要な論点の一つであった。いつからアジア地域で「冷戦」という言葉を使うべき状態が形成されたのか。これが一つの論争点であった。しかし、その論争においては「冷戦」の意味がブラックボックスになったまま、言葉だけが奪い合いの対象となってきた。従って論争は焦点が定まらないだけでなく、議論は平行線を辿ることになった。この論争はどのように解決すべきだろうか。以下では、二つのイメージが抱える問題をそれぞれ個別に検討する。その上で両者のイメージを重ね合わせたときに見えてくる問題を探してみたい。

(2) 第一イメージの問題点

第一イメージが抱える問題として少なくとも二点指摘できる。まずこのイメージに属す

る研究の多くは、1950年前後の時期までアジア地域における「現状維持 (Status-quo)」（「ヤルタシステム」）を重視している。彼らは「現状維持」しようとする大国の行動に主軸をおき、アジア地域内の変化や対立、さらには大国とそれらとの関係性を過小評価している。

第二は分析上の問題である。既述のように「ヤルタシステム」の概念を用いた研究は、政策決定者の認識やイデオロギーと権力政治のレベルとを分けている。まず、ここで次の点が問題になる。米ソの政策決定者が冷戦的認識に転換してから数年間は、その認識が彼らの権力政治的政策に大きな影響を与えなかった。すなわち米ソは勢力範囲を維持し続け、それを拡大しなかったとされる。その理由は何か。認識の変化が生じているにもかかわらず、それによって従来の政策が変更されたわけではないとすれば、政策決定者の冷戦的認識を分析することにどれほどの意味があるのか、ということになってしまう。そうなると新たな問題が出てくる。米ソがアジアで勢力範囲を拡大するに至った直接的原因は何か。それを米ソの冷戦的認識に求められないならば、他を考えなければならない。彼らは必ずしもそれを明示的に議論しているわけではないが、全体の論旨から判断するとその要因をアジア地域の現地勢力によって引き起こされた国際関係の変動にもとめていることがわかる。入江の分析は、PRCの成立や朝鮮戦争の開始が独立変数となっていて、米ソはそれに追従してヤルタシステム維持の政策を変更していったのだと読みとることができる⁽³⁷⁾。

第一イメージは、1950年前後までに起きたアジア地域の国際関係の変動（例えばPRCの成立など）は現地の政治勢力を中心に引き

起こされたものであって、米ソ関係が投影されたものではないと見なしていることなる⁽³⁸⁾。

（3）第二イメージの問題点

では第二イメージはどうか。三つ問題点が指摘できる。第一に力の真空が生じた地域、または大国による戦後処理の対象となった地域に問題の焦点を限定していること。第二に対象とする時期を限定していること。第三に政策決定者の認識レベルを重視するが、具体的に採用され実行された軍事、政治、経済政策に対する分析が不十分であること。

この三つの問題点はウェスタッドの研究に典型的に見られる問題である。第一に、彼が分析する上で焦点を当てているのは主に中国東北である。東北に分析を限定した場合、それ以外の地域で起きていた歴史的事実は捨象されてしまう。当時、中国東北が中国全体、アジア全体、さらには世界のなかでどのような位置を占めていたのか。中国東北の歴史を全体のなかで相対化する視点が欠如しているのである。第二に、彼は中国東北で国共内戦が生じる1946年初夏までの時期を対象にしている。ここから得られた結論がそれ以降の歴史にどう位置付けられるのかを検討していない。例えば47年から50年にかけて米国がアジア本土から軍事関与を徐々に撤退させ、「不後退防衛線」戦略に向かっていったことの意味をどのように捉えるのかという問題が残る⁽³⁹⁾。第三に、ウェスタッドは中国をめぐる米ソ冷戦の性格を次のように捉えている。米ソ両者は中国において相互の意図と能力についてのイメージを認識上試しあった、と⁽⁴⁰⁾。ここでの問題点は、政策決定者の認識を当時の歴史的事実の評価に大きく投影していることである。政策決定者の認識と実際に

実行された政策との関係、或いは具体的な軍事、政治的状況を丹念に追う必要がある。

第二イメージがこうした三つの問題点を抱える原因は、「冷戦」的要素を最大限に導き出そうとするあまり分析の焦点を限定してしまったことにあるといえる。

(4) ゼロ・サム関係

では二つのイメージを重ね合わせるとき見えてくる問題とは何か。一方が大国により「現状維持される地域」を強調すれば、もう一方は「力の真空が生じた地域」を強調する。両者のイメージを重ね合わせると、ちょうど一つのパズルが出来上がるように、相互に強調する部分と捨象する部分が入れ替わっていることに気付く。両者の論争は、このようなゼロ・サム関係になっている。

このゼロ・サム関係はどのように解決すればよいのか。実は両者ともに「冷戦の形成」を理解するにあたって、「冷戦」が顕著に観察できる対象「冷戦」の中心を順に追っていくというアプローチでは共通している。「冷戦」の中心を、戦後当初はヨーロッパにもとめ、そして次第にアジアに視点を移動させていくのと、最初からアジアの一部の地域に焦点を合わせるのとで両者の見解は異なる。しかし、いずれも「冷戦」の中心に分析の焦点を当てることでは一致している。この共通点を再検討することが、ゼロ・サム関係を解決する糸口になるのではないか。その上で「アジアにおける冷戦の形成」を分析するための新しいアプローチを探ってみたい。

「アジアにおける冷戦の形成」をどう分析するか

第二次世界大戦後、世界では様々な現象が起こった。例えば、戦後国際政治上の主な対

立軸や出来事を挙げてみると、米ソ間の権力政治闘争、イデオロギー対立、大国間の対立（東西陣営内の対立など）、世界の中の商業的中心と市場・原料供給をする周辺地域との対立、第三世界地域での独立運動、国民国家形成の運動、軍事・科学技術の進展などがあった⁽⁴¹⁾。ここでは、戦後の様々な現象を包括する空間を「戦後の歴史空間」とする。それは戦前や冷戦後の現象と連続性をもち、「冷戦」とは必ずしも等値されない空間である。

このように捉えると、本稿で定義した「冷戦の構造化」というプロセスは、「冷戦」の状態が「戦後の歴史空間」に広がっていく過程であることがわかる。具体的には「冷戦」状態の地理的な拡大、対立レベルの拡大（例えば米国の「封じ込め」手段の政治的手段から軍事的手段への発展）、植民地・半植民地地域における独立運動や国民国家形成の運動への影響などである。少なくとも冷戦の形成期においては、「冷戦」状態と「戦後の歴史空間」が同一ではなく、両者にズレがあったといえる。従って「冷戦史」を記述するには、冷戦の中心を追うだけでなく、「冷戦の構造化」を「戦後の歴史空間」のなかに位置付けて議論する必要がある。

では、「アジアにおける冷戦の形成」はどう分析すべきか。戦後アジア地域の国際関係の変容において「冷戦の構造化」がどのように位置付けられるのかを問う必要があるだろう。第一に、戦後アジア地域の脱植民地化や国民国家形成の運動に「冷戦の構造化」がどれほどの影響を与えたのかが問題になる。1950年前後までの時期、アジア地域に「冷戦」があったかどうかだけを問題にするのでは十分ではない。どの時期に、どの地域で、どのようなレベルの「冷戦の構造化」が見ら

れたのか。米ソ対立は認識レベルに限定されたのか、或いは現実には米ソの外交政策がアジア地域内の諸勢力間の対立と連動していたのか。また、その対立が朝鮮戦争を経て、米中冷戦に発展していくとき、どの程度の変化と継続性をもっていたといえるのか。このような問題は再検討しなければならない。例えば、戦後中国の国共内戦が「冷戦の構造化」の影響をどの程度受けて、或いは受けなくて開始、進展したのかということは重要な論点となる。

第二に、グローバルな範囲での「冷戦の構造化」とアジア地域における「冷戦の構造化」との関係を再検討しなければならない。ヨーロッパで生じた米ソ冷戦が朝鮮戦争以降、アジアに波及したと見るのか、或いは戦後アジア地域の国際関係の変容とグローバルな範囲での「冷戦の構造化」が相互に影響しながらアジアの冷戦が形作られたのか。この論点を再検討する際、「冷戦の構造化」を推し進める主体を米ソなどの大国に限定するのではなく、アジア地域の諸勢力がそれにどのように関与していたのか、その相互作用を分析する必要がある。

いずれにせよ従来の論争において明示的に問題にされなかった問題を再検討することが、新たな論争のための出発点になるだろう。

(注)

- (1) マクマホン、アジア冷戦の各イシュー(米中関係、米韓関係、米日関係などで論争となっている諸問題)について、研究動向を要領よく整理した数少ない成果の一つである。しかし「アジアにおける冷戦の形成」という点からは、研究動向を整理していない。McMahon, Robert J., "The Cold War in Asia: Toward a New Synthesis?" in *Diplomatic History*, Vol. 12, No. 3 (Summer 1988) pp. 307-327.
- (2) レイノルズは、戦後米国が世界において果たした役割の大きさを認めながらも、それが戦後史の全体像ではなかったこと、「冷戦」だけでは戦後史の全てを説明

できないという立場から戦後の歴史を描いた。Reynolds, David, *One World Divisible: A Global History Since 1945* (New York, London: W. W. Norton & Company, 2000)

- (3) 「冷戦」の特質については以下を参考にした。高橋進「冷戦」、『世界大百科事典30』、平凡社、1989、86-90ページ; 山極晃「序論」、山極晃編『東アジアと冷戦』、三嶺書房、1994、5-10ページ。
- (4) 「デタント」を「状態」ではなく「プロセス」と見なすべきである、という点については以下を参考にした。滝田賢治「冷戦概念と現代国際政治史: 日米における議論を基礎に」、細谷千博・丸山直起編『ポスト冷戦期の国際政治』、有信堂高文社、1993年、2-24ページ。滝田は「デタント」を「冷戦」期以外にも適用できる一般的概念として使用している。しかし本稿では「デタント」を狭く定義し、それを「冷戦」という状態のなかの一つのプロセスと捉えたい。「デタント」が「冷戦」状態の一部であるという見方については以下を参考にした。LaFeber, Walter, *America, Russia, and the Cold War, 1945-1996*, Eighth Edition (The McGraw-Hill Companies, 1997) Ch. 11.
- (5) これは鴨武彦の冷戦の構造化というイメージを参考にした。鴨武彦「世界政治における冷戦構造化の崩壊と終焉: その背景分析と歴史の意味」、鴨武彦編『講座・世紀間の世界政治 1 旧超大国の国際関係』、日本評論社、1994年、13-72ページ。ただ鴨は冷戦の構造化を「冷戦」のプロセスとは捉えていない。なお「構造化」は国際レジーム、同盟の形成など「制度化」を含む概念である。
- (6) ただし「構造化」は米ソが支配的、抑圧的に主導して進めるプロセスだけではない。例えば米国の西欧への軍事、政治、経済的関与の拡大は西欧各国の政府、人民の意志に沿ったもの、つまり招聘された帝国であるという見方を否定するものではない。「帝国の招聘」という見方については以下を参考にした。Lundestad, Geir, "Empire by Invitation? The United States and Western Europe, 1945-1952," in *Journal of Peace Research*, Vol. 23, No. 3 (Sep. 1986) pp. 263-277.
- (7) 注意すべきことは、冷戦の各時期にいずれか一方のプロセスだけが機能していたというのではなく、両者が相互作用しながら全体の趨勢としていずれか一方のプロセスが見受けられたということである。
- (8) これは数多くの研究成果の最大公約数をとった結果の整理であるから、各々の議論には多少の見解の相違はある。しかし上記のような整理が成り立たないというわけではない。
- (9) 第二イメージを論じる当事者たちは自らの議論が一部の「局地」に焦点を当てていることに無自覚であるか、あるいは明示的に議論していない。
- (10) 以下が挙げられる。Irie, Akira, *The Cold War in Asia: A Historical Introduction* (New Jersey, 1974); Gaddis, John L., *The Long Peace: Inquiries Into the History of the Cold War* (Oxford University Press, 1987) Ch. 4; Gaddis, John L., *We Now Know: Rethinking Cold War History* (Clarendon Press Oxford, 1997) Ch. 3; Yahuda, Michael, *The International Politics of the Asia-Pacific, 1945-1995* (London and

- New York: Routledge, 1996) Zhao, Suisheng, *Power Competition in East Asia: From the Old Chinese World Order to Post-Cold War Regional Multipolarity* (London: Macmillan Press, 1997) Blum, Robert M., *Drawing the Line: The Origin of the American Containment Policy in East Asia* (W. W. Norton & Company, 1982) Cohen, Warren I., "Acheson, His Advisers, and China, 1949-1950," in Borg, Dorothy and Heinrichs, Waldo (eds.), *Uncertain Years: Chinese-Americans Relations, 1947-1950* (Columbia University Press, 1980) pp. 13-52; Hunt, Michael H., "Mao Tse-tung and the Issue of Accommodation with the United States, 1948-1950," *ibid.*, pp. 185-233; Heinrichs, Waldo., "American China Policy and the Cold War in Asia: A New Look," *ibid.*, pp. 281-292; Tucker, Nancy Bernkopf, *Patterns in the Dust: Chinese-American Relations and the Recognition Controversy, 1949-1950* (New York, 1983) Graebner, Norman A., *America as a World Power: A Realist Appraisal from Wilson to Reagan* (Scholarly Resources Inc., 1984) Levine, Steven I., *Anvil of Victory: The Communist Revolution in Manchuria, 1945-1948* (Columbia University Press, 1987) Nagai, Yonosuke, "The Roots of Cold War Doctrine: The Esoteric and the Exoteric," in Nagai, Yonosuke and Irie, Akira (eds.) *The Origins of the Cold War in Asia* (University of Tokyo Press, 1977) pp. 15-42; Lee, Steven Hugh., *Outposts of Empire: Korea, Vietnam, and the Origins of the Cold War in Asia, 1949-1954* (McGill-Queen's University Press, 1995) 神谷不二「朝鮮戦争：米中対決の原型」、中央公論社、1977年；小此木政夫「朝鮮戦争：米国の介入過程」、中央公論社、1986年；坂本義和「地球時代の国際政治」、岩波書店、1992年、305ページ；藤原帰一「アジア冷戦の国際政治構造 中心・前哨・周辺」、東京大学社会科学研究所『現代日本社会 7 国際化』、1992年、327-361ページ；林利民「試論美国对华遏制政策的確立與貫徹」、中国人民大学『復印報刊資料・中国現代史』、1998年3月、130-136ページ。
- (11) Irie, *ibid.*, Ch. 3, 4.
(12) *Ibid.*, Ch. 3, 4, 5.
(13) *Ibid.*, Ch. 4, 5.
(14) Yahuda, *op. cit.*; Zhao, *op. cit.*; Tucker, *op. cit.*
(15) 「機会喪失論」を議論する研究としては以下が挙げられる。Cohen, *op. cit.*; Tucker, *op. cit.*; 曹希嶺「新中国成立前夕中国共産党的対美政策」、中国人民大学『復印報刊資料・中国現代史』、1998年5月、84-88ページ。なお49年6月まで中共が米国と外交関係を樹立する可能性があったとする議論は以下である。Hunt, *op. cit.*; Hunt, Michel H., *The Genesis of Chinese Communist Foreign Policy* (Columbia University Press, 1996)
(16) Gaddis, *op. cit.*, 1987, Ch. 4; Gaddis, *op. cit.*, 1997, Ch. 3. ギャディスの他に、同様の見解をとる研究としては以下がある。林利民、前掲論文。
(17) Nagai, *op. cit.*; Heinrichs, *op. cit.*; Blum, *op. cit.* 卞慕東「論建国前後中美全面対抗の必然性」、中国人民大学『復印報刊資料・中国現代史』、1997年3月、83-88ページ。なお小此木は、米国政府が「不後退防衛線」を引きながらも朝鮮に対しては非軍事的封じ込めを47、48年から継続させていたとする。小此木、前掲書。
(18) こうした研究の方向性を明確に打ち出した代表的論者としては次が挙げられる。陳兼「关于中国和国际冷战史研究的若干問題」、中国人民大学『復印報刊資料・中国外交』、2002年第3期、52-61ページ。
(19) 例えば、以下を参照。Westad, Odd Arne., "Secrets of the Second World: The Russian Archives and the Reinterpretation of Cold War History," *Diplomatic History* 2 (Spring 1997) pp. 259-271.
(20) Westad, Odd Arne., *Cold War and Revolution: Soviet-American Rivalry and the Origins of the Chinese Civil War, 1944-1946* (Columbia University Press, 1993) Ch. 7, Conclusion.
(21) 例えば次の研究が挙げられる。Sheng, Michael M., *Battling Western Imperialism: Mao, Stalin, and the United States* (Princeton University Press, 1997) Chen, Jian, *Mao's China and the Cold War* (The University of North Carolina Press, 2001) Ch. 1; Yick, Joseph K.S., *Making Urban Revolution in China: The CCP-GMD Struggle for Beijing-Tianjin, 1945-1949* (M. E. Sharpe, 1995) Ch. 2; 楊奎松「美蘇冷戦の起源及对中国革命的影響」、歴史研究編輯部『歴史研究』、1999年第五期、5-22ページ；尹德蓉「国、共、美、蘇的政策與馬歇尔調処の失敗」、中国人民大学『復印報刊・中国現代史』、1998年8月、79-84ページ；于景陽・王晶「論東北解放戦争初期中国共産党與蘇連の關係」、中国人民大学『復印報刊資料・中国現代史』、1995年9月、139-142ページ；資中筠『美国对华政策的緣起和發展（1945-1950）』、重慶出版社、1987年；資中筠「追根溯源：对美国对华政策（1945-1950）的再思考」、中国人民大学『復印報刊資料・中国外交』、2001年第1期、44-49ページ。
なお牛軍は、1946年当時中国において米ソ冷戦が存在したこと、米国が東北において対ソ封じ込めの文脈で国民党政府軍の輸送支援を行っていたことを認め、それらが内戦の原因の一部であったとする。しかし米ソ冷戦は中国内戦に間接的影響しか与えておらず、中国人自身が内戦の推移を決定したとする。牛軍「一九四五年至一九四九年的美蘇国共關係」、歴史研究編輯部『歴史研究』、2002年2月、84-103ページ。
(22) 近年の代表的な研究としては以下が挙げられる。Sheng, *op. cit.*, Ch. 8; Sheng, Michael, "The Triumph of Internationalism: CCP-Moscow Relations before 1949," *Diplomatic History* 1 (Winter 1997) pp. 95-104; Westad, Odd Arne., "Losses, Chances, and Myths: The United States and the Creation of the Sino-Soviet Alliance, 1945-1950," *ibid.*, pp. 105-115; Chen, *op. cit.*, Ch. 2; 卞慕東、前掲論文；劉成「新中国成立前後美国对华政策調整的原因」、中国人民大学『復印報刊資料・中国外交』、2001年第2期、41-47ページ；劉立範・李安民「解放戦争前後中美關係的演變及影響」、中国人民大学『復印報刊資料・中国現代史』、1997年9月、103-107ページ。
(23) 代表的なものとしては以下がある。五十嵐武士『戦後日米關係の形成：講和・安保と冷戦後の視点に立

- って a、講談社、1995年；Schaller, Michel, *The American Occupation of Japan: The Origins of the Cold War in Asia* (New York: Oxford University Press, 1985) (五味俊樹監訳『アジアにおける冷戦の起源：アメリカの対日政策』a、木鐸社、1996年)。
- (24) Cumings, Bruce, *The Origins of the Korean War: Liberation and the Emergence of Separate Regimes 1945-1947* (Princeton University Press, 1981)
- (25) ジョセフ・ナイは冷戦期の過去50年間を振り返り、対ソ連「封じ込め」が米国の外交政策の中心であったと述べた。Nye, Joseph S., Jr., "Redefining the National Interest," *Foreign Affairs*, Vol. 78, No. 2 (1999) p. 22.
- (26) 「正統派」の特徴については以下を参考にした。Kaldor, Mary, *The Imaginary War: Understanding the East-West Conflict* (Basil Blackwell, 1990) p. 37.
- (27) 「修正主義派」の議論の特徴については以下を参考にした。Ibid., p. 37; Maier, Charles S., "Revisionism and the Interpretation of the Cold War Origins," in Maier, Charles S., *The Origins of the Cold War and Contemporary Europe* (New York, London, 1978) p. 11.
- (28) Paterson, Thomas G., *Meeting the Communist Threat: Truman to Reagan* (New York, 1988)
- (29) Gaddis, John L., *The United States and the Origins of the Cold War 1941-1947* (Columbia University Press, 2000) Ch. 7. その他、ダニエル・ヤーギンが挙げられる。彼は米国外交をヤルタ原理(ソ連との合意形成と戦後協定の確保を目標とする。ソ連の対外政策をイデオロギーよりは伝統的大国と同様にパワーの観点から理解する原理)とリガ原理(そもそも1940年代初期までに形成された米国の対ソ連観。ソ連の行動におけるイデオロギーの役割を重視してソ連を世界革命国家と見なす原理)から理解する。47年夏までにジョージ・F・ケナンの封じ込め構想が米国政府内で影響力をもち、リガ原理が支配的になったとする。Yergin, Daniel, *Shattered Peace: The Origins of the Cold War and the National Security State* (Houghton Mifflin Company, 1978)
- (30) 「限定的封じ込め」という用語は佐々木によった。佐々木卓也『封じ込めの形成と変容』三嶺書房、1993年。その他、第一の立場をとる代表的論者としては以下が挙げられる。Gaddis, John L., *Strategies of Containment: A Critical Appraisal of Postwar American National Security Policy* (New York, 1982) Gellman, Barton, *Contending with Kennan: Toward a Philosophy of American Power* (New York, 1984)
- (31) 1949年10月頃からポール・ニツェを中心として国務省、国防総省政策検討グループでケナン型「封じ込め」政策の見直しが始まった。その結果、翌年4月14日に完成したトルーマン大統領に提出された国家安全保障会議の文書が「NSC68」である。
- (32) 例えばギャディスは、米国の「封じ込め」政策がアジアに拡大する時期とアジアに冷戦が拡大していく時期を重ね合わせている。Gaddis, op. cit., 1987, Ch. 4; Gaddis, op. cit., 1997, Ch. 3.
- (33) Brown, Secom, *The Faces of Power: Constancy and Change in United States Foreign Policy from Truman to Johnson* (New York, 1968) Spanier, John, *American Foreign Policy Since World War II*, Sixth Edition (New York, 1975) Graebner, op. cit.; Yahuda, op. cit.; Zhao, op. cit.
- (34) 菅英輝『米ソ冷戦とアメリカのアジア政策』a、ミネルヴァ書房、1992年。パターソンも同様の立場をとっている。Paterson, op. cit., Ch. 4.
- (35) Cumings, op. cit.; Buhrte, Russell D., *Soviet-American Relations in Asia, 1945-1954* (University of Oklahoma Press, 1981) Stueck, Jr., William Whitney, *The Road to Confrontation: American Policy Toward China and Korea, 1947-1950* (The University North Carolina Press, 1981) Gallicchio, Marc S., *The Cold War Begins in Asia: American East Asian Policy and the Fall of the Japanese Empire* (Columbia University Press, 1988) 趙学功『巨大的転変：戦後美国対東亜的政策』a、天津人民出版社、2002年。
- (36) 第二イメージの代表的論者であるウェスタッドが著書のなかで、マーク・S・ガリッチオの議論(1945年夏にアジアですでに冷戦が開始していた)に賛同すると述べていることは何より示唆的である。Westad, op. cit., 1993, p. 221.
- (37) Irie, op. cit., Ch. 5.
- (38) スティーブン・リーバインは、1946年初夏に東北で国共内戦が生じてから米ソ間に中国問題をめぐる衝突はしないという暗黙の了解が成り立ったとする。従って国共内戦の推移を決定付けた最大の要因は国共自身、つまり国内要因であるというのが彼の見解である。Levine, op. cit., Introduction, Ch. 1, 2, 7.
- (39) この問題は、ガリッチオにも指摘できる。彼は米国のアジア政策について1946年までのものとそれ後の「不後退防衛戦略」が相違するものと述べている。しかし彼は後者の戦略を研究の対象にせず、前者を検討しただけでアジアの冷戦が開始していたと結論付けている。Gallicchio, op. cit., Conclusion.
- (40) Westad, op. cit., 1993. これはウェスタッドだけではなく、彼と同じような分析をしている論者に共通する問題である。Sheng, *Battling Western Imperialism*; Gallicchio, op. cit.; 楊奎松、前掲論文；于景陽・王晶、前掲論文。
- (41) 戦後国際政治上の主な対立軸や出来事については、以下を参考にした。LaFeber, Walter, "An End to Which Cold War?" in Hogan, Michel J., *The End of the Cold War: Its Meaning and Implications* (Cambridge University Press, 1992) pp. 13-19; Painter, David S. and Leffler, Melvyn P., "Introduction: The International System and the Origins of the Cold War," in Painter, David S. and Leffler, Melvyn P. (eds.) *Origins of the Cold War: An International History* (London and New York Routledge, 1994) pp. 1-12.

(まつむら・ふみのり 早稲田大学大学院
E-mail: 1021509f@toki.waseda.jp)